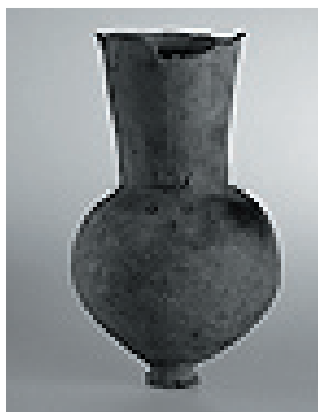


記号を付す弥生土器(1)



●コレクション・データ

時代 弥生時代後期
調査 唐古・鍵遺跡 第33次調査
発見年 1988年
大きさ 高さ 27 cm
口径 11.5 cm
展示位置 第一室 「まつりといのり」

弥生時代後期、奈良県や大阪府を中心に弥生土器の表面に単純な記号を付すものが多く出現します。

記号は、へらで描いたもの（直線）や直径1cmほどの竹管状の工具を押し付けたもの（円形）、赤色顔料や粘土紐で表現したものなど、さまざまな方法で土器に付けられています。これらの記号を集成してみますと、「一、二、三、一、二、三、〇、U、〇、△、▽、×・・・」などバラエティに富みますが、それらは規則的でさらに組み合ったり、並列的に記されたりしており、記号としての体系が整っていることがわかります。

このようなことから、森浩一氏（同志社大学名誉教授）は、中国から日本に漢字が伝わらなかつたら、このような記号が文字として成立したかもしれないと指摘しています。

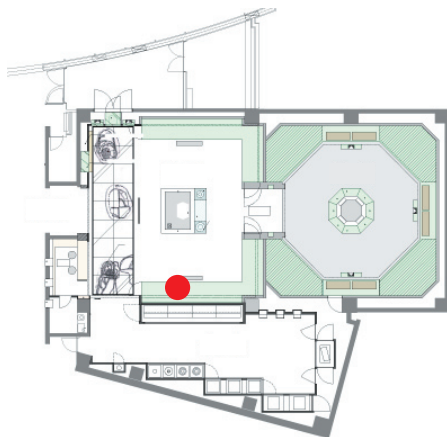
一方、春成秀爾氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）は、弥生時代中期に盛行する絵画土器と記号が連続する関係にあることから、絵画が省略されて記号が成立したと考えていま

す。確かに絵画が省略されて記号になったものも見られますが、後期の記号は絵画の意匠以上にバリエーションがあり、一元的にとらえることはできなさそうです。

さて、今回、紹介する記号（文）土器は、完全な形の長頸壺に2つの記号が組み合わせられたものです。頸部下端にへらで「▽」を、胴部上端には竹管文を3つ逆山形に並べ、上下に2つの記号が付されています。この記号の組み合わせが何を意味しているのかはわかりません。ただし、この記号が記された壺は、他の多くの記号土器とともに井戸に供献されており、「水のマツリ」との関連が想定できそうです。

このように記号土器は、特別な土器として使われる例が多く、記号に何らかの意味が込められていたことは間違いありません。

このような記号がその後文字として発展していたならば、その意味を解くことができたかもしれません。



ミュージアム上面図と展示位置